

# あしやしすまふんぶん通信

2000年  
(平成12年)  
秋号  
(第3号)

発行者：芦安ファンクラブ  
山梨県中巨摩郡芦安村芦倉  
1589-8  
055-288-2531

## 第12回芦安紅葉祭り

十一月十二日、「第十一回芦安紅葉祭り」が金山沢「こだま公園」で開かれた。本年は夏の気温が高く雨量にも恵まれたため、金山沢は見事な紅葉に彩られ、この日は村内外から約五百人の人々が集まった。村では演歌歌手やコメテイアンをまねき祭りを盛り上げる一方で、ワイン、バーベキュー等盛りだくさんの出し物も提供した。

芦安ファンクラブでは、十月定例会で村から要請を受け、役場職員の助けもかりて、そば打ちの実演と、そば・うどんの販売を行うことになった。この日、芦安村に古くから伝わるそば打ち技術を持つ清水ちま子さんと伊井弘子さんの姉妹が「そば打ち名人」として迎えられた。両氏の作った手打ちそばは、併せて販売した手打ちうどんとともに一時間で約二百五十食を売り切るほどの好評であった。

本年度の「芦安紅葉祭り」では、「手打ちそば」や「醤油の実」に代表される芦安の特産物の未来に光が見えたとの意見も聞かれた。また、忙しそくに働く「名



## 秋の登山教室

芦安ファンクラブ主催、芦安村協賛の第二回南アルプス芦安村登山教室が九月二十日、十月一日の二日間に行われて開催された。一日目は南アルプス温泉ロッジ研修センターで、「登山時の救急対処法」登山に生かす地形図情報」という内容で講習会が開かれた。「救急対処法」では峡西消防救急隊員による実演を交え、三角巾の使い方等の指導が行われた。「地形図情報」では、白根高校教諭・望月重臣氏が、コンパスを実際に使いながら地形図の上手な見方を講習した。一日目は、初心者が栗沢山中級者が仙丈岳の2コースに分かれ登山実地研修が行われた。初級の栗沢山、中級の仙丈岳ともに全員無事に登頂・下山した。参加者は、今後の希望として新緑や花の美しい時期の実施や北岳、甲斐駒、鳳凰三山といった名の知れた山への登山をあげた。また、地元の人だけが知る山道を登山史や自然についてのガイドを受けながら山登りを楽

## 前田晃賞

### 塩沢氏が受賞

財団法人山人会(川合澄夫会長・新宿区新宿五 十八 二丁)の第

十四回前田晃文化賞の選考が行われた。南アルプスの自然環境保全、山岳文化・地域文化振興への長年に渡る貢献が評価され、今回は塩沢久仙氏が同賞に選ばれた。塩沢氏は一九四二年生まれ、六十五年から夜叉神峠小屋、八五年から広河原山荘管理人となった。

選考では、塩沢氏が芦安ファンクラブ、南アルプスクラブ、日本高山植物保護協会の設立会員として、キタダケソウをはじめとする高山植物の保護、大樺沢の水質汚染の防止、広河原山荘での谷間のコンサートなど、山岳・地域文化の振興と自然保護活動を地道に続けてきたことが受賞の理由となった。



タイトル：ゴーロ沢より紅葉の北岳  
撮影：清水准一

心でみるもの

# 二十一年目の南アルプスを考える

日本山岳協会常務理事・内藤造

第三回南アルプス芦安村登山教室に参加した。心配された雨も上がり、ハイマツの稜線に映える雲と青空は、いつもながらの新鮮さと快い一時をくれた。前回、講義を受け持ったが研修登山に参加できなかった。今回はそれを埋め合わせる意味での参加だった。この登山教室は参加者の多くに充実感を与え、全体的には成功裡に終了したと感じた。

しかし、気になる点も少なくない。地域性を生かした芦安村登山教室の今後と継続のために少し考えてみた。

これまでの芦安村登山教室は手作りで行って試行錯誤しながらの企画・運営であったと思われる。内容的には物足りない面が多々ある。実施内容を辛口で評価すれば、山を自然や山岳文化を学ぶ場ととらえている「登山教室」と、それを娯楽施設ととらえている「ツアー登山」の中間のような感じで、どちらかといえば芦安ファンクラブによる「イベント」の色彩が強く、にわか仕立てで目的が見えにくいものとなっている。将来、この芦安村「登山教室」を定着、発展させ、クラブが目指す「県民や登山者が南アルプスを考える」輪を広げるためには、まず運営の体系や内容についての整備・向上と参加者の安全確保が望まれる。

具体的に示すと「登山教室」を開催する場合の配慮事項は、1. 企画段階でのルート事前調査、救助対策、講義内容の検討、2. 募集段階でのコースや研修内容の説明、参加者による事前学習、参加者の登山技量や体力の把握、3. 実行段階でのスタッフのレベル把握とそれに応じた配置、参加者の健康チェック、緊急時対策、山岳保険の加入等があげられるが、特に参加者の安全確保は念には念の入った対応が求められる。

また、講義や研修登山での指導内容は、「山を学び、自分を知り、登山を学ぶ」のながれで行い、「頼る登山」から「自力での登山」が可能な技術を身につけられるよう進めることが大切である。ここでは、山や登山の体系的な話題とともに、より具体的な話もつまくとり入れ、山を理解した専門家の実践に基づいた分かりやすい指導が求められる。参加者一人一人が、たとえ一つでも生きた登山技術を学び、それをいかせるようなセットづくりへの工夫が大切である。

リスクを回避しながらこの登山教室のポテンシャルを高めるには、講義内容の充実や、スタッフの技術力・指導力を向上しなくてはならない。講義については、その内容を講師とあらかじめ協議し、開催する教室の内容や目的に合うよう調整することが大切である。指導者や山行に同行するスタッフは実践的な指導能力を身につけた有資格者であることが望ましいが、これについては段階的に進めるとして、現状としては少なくとも指導者講習会の受講や内部での研修を御願いたい。また、研修登山後の反省会は、参加者の将来にとって大きな成果となるよい機会であるから、形式的なものではなく実質的な討議が望ましい。経験や知識に乏しい参加者に対して、講師が質疑応答を通じて指導することで、実体験を終えたばかりの参加者には内容が理解されやすく、登山教室から多くの成果がもたらされるであろう。

すでに実施されていることもあると思うが、この際、改めて登山教室運営のあり方を見なおし、よりよい登山教室づくりをお願いしたい。南アルプスを思う、長い時間軸での検討と構築を希望する。

# 白根御池小屋の再建を目指して

十月一日、第三回南アルプス芦安村登山教室に参加し仙丈ヶ岳へ登った。この日は多くの参加者とともに、山の厳しさや自然の暖かさを体験することができた。経験豊富な

引率者による参加者への細かな気遣いをはじめ、この登山教室は暖かく、厳しくそして素晴らしい研修の場として私にとっては大きな収穫だった。

登山者の安全を守る

# 山小屋

親しみのある

はしてはいるが、応急的なものである。登山者の皆さまには不便をかけているのが現状だ。

今後、大いなる希望を持って、安全な山小屋としての位置及び構造を持った、親しみやすい山小屋の再建を望むものである。また、その実現に向けての一端をなすて行きたいと思つ

芦安村・企画観光課 深沢秀

十月一日、第三回南アルプス芦安村登山教室に参加し仙丈ヶ岳へ登った。この日は多くの参加者とともに、山の厳しさや自然の暖かさを体験することができた。経験豊富な引率者による参加者への細かな気遣いをはじめ、この登山教室は暖かく、厳しくそして素晴らしい研修の場として私にとっては大きな収穫だった。

崩がおきた記録はないといわれるこの場所で雪崩が発生し、しかもそれは御池小屋の全部を倒壊させた。この事件は、我々の理解をはるかに超えた自然の厳しさをつくづく実感させるものであった。

旧御池小屋は平成三年に建て替えられたものである。収



旅する大日如来像

芦安村文化財の一つである「白根大日如来像」は、現在、諏訪神社に安置されている。江戸時代後期に編纂された「甲斐国志」の「白峰」の項にはこれに関する記述がある。

「白峰」此山本州第一ノ高山ニシテ西方ノ鎮タリ。…中略…相伝ウ山上ニ日ノ神ヲ纏ル。其ノ像黄金ヲ以テ鑄ル。長七寸許容ルニ銅至ヲ以テス。高式尺式寸広方八寸其四隅ニ鈴ヲ掛ク。風吹ケハ声アリ。…

小島烏水らの記録には「奉納白根大日如来寛政七年（一七九五）乙卯六月「日本アルプス第一巻」とあり、この黄金の大日如来像は今から二百年も前に北岳山頂に纏られたものであるといふ。これは同時に北岳が、北アルプスの槍ヶ岳（播隆上人・

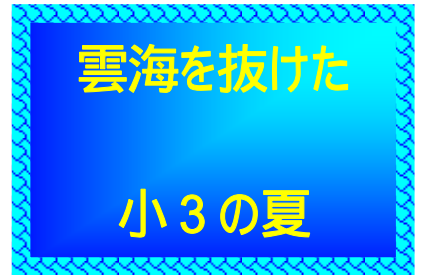


村文化財：大日如来像（諏訪神社）

一八二八年開山）より二十三年もはやく拓かれていた事を裏付ける証拠でもある。

この大日如来像は明治の後半に、何者かによって北岳山頂より持ち去られたが、後に七丈小屋の七兵衛さん、北沢小屋の長兵衛さん、駒ヶ岳五合目小屋の古屋氏等が協力し探し当てた。その後、しばらくは五合目小屋に安置されていたが家族に病人が絶えず、榊村の芦沢行者が預かり纏ったがやはり病人が絶えなかつたので、芦安村の諏訪神社に奉祀されることになった。

この大日如来像は明治四年に名取直衛によって建立された甲斐が根神社とともに北岳の登山史を飾る象徴的存在である。芦安ファンクラブでは百年の歲月を経て旅してきたこの大日如来像をもとの北岳山頂へ再安置する計画を検討しているところである。



北岳に登った

芦安小学校三年 南アルプスチロル学園 さえぐさ たくろう

北岳は日本で二ばんめに高い山だと言われて、どきどきしてきんちようしたから夜よくねむれなかつた。つぎの日は五時におきた。ちよつとさむいとおもつた。バスでねむつていると広河原についた。ちよつとだけねむかつた。広河原でじゅんび運動をした。もうぜんぜんねむくなかつた。いよいよ登り始めた。荷物はすこしおもかつた。

登っているうちに荷物がおもくかんじなかつた。歩くじゅんばんはさつちゃんたくろう、みさと、ふく園長、たかひろ、つかさ、まこと、ひろたか、もーちゃん、やまちゃん、園長、じゅんいちさん、きゅうけいで はゼリーがおいしかった。まわりにはとげとげの葉っぱがあつた。またすこしあるいた。みちには水が流れていた。その小川をわたつた。くつがぬれないように石の上をとつた。みんなしんけんにあるいていた。お池小屋が見えた。はじめの小屋だつたのです。くうれしかった。なぜならば、トイレにいきたかつたからだ。お池でトイレとごはんをすませた。「お池小屋はどうしてお池小屋って言うのかな！」と思つた。お池小屋を出発した。そしたらお池があつた。お池小屋の意味がはじめてわかつた。



前列右から4番目が三枝君

次は「草すべり」といふ所を歩いた。とても長かつた。しばらく行くと「お花畑」があつた。そこは森林げんかいだつた。そこにはクロコリがさいていた。おいをかいでみると、とてもいいにおいだとはいえない。はながねじれると思つた。シナノキンバイがたくさんさいていた。一本のくきに五つぐらいの黄色い花がついていた。とてもきれいだつた。また歩いていくと、雨がふってきたので急いで雨具を着た。そうしたらやんだ。雨具をぬいだ。そうしたらまたふつてきた。雨具を着た。そうしたらまたやんだ。ぬぐのがめんどろつたのでそのまま着ていた。でも、あつてげんかいになつたので雨具をぬいだ。そうしたらなんと、またふつてきた。みんないやいや雨具を着た。まうやく目的地のかたの小屋についた。小屋でたいそをしした。かたの小屋でゆづはんを食べた。おきやくさんがたくさんいたので、いそいで食べなければいけなかつた。もう少し食べなかつた。夕方になって日がしずむところを見た。夕日は赤とオレンジ色のあいだの色で雲海にみずくきれいだつた。かたの小屋はちいさいのに人が多かつた夜ねる時、たたみ一枚に二人でねるぐらいせまかつた。朝、かたがいたかつた。さすが、かたの小屋。小屋では荷物をしよつていなかったから朝出発するとき荷物が重く感じた。道はかたはばくらいで、左は山、右はガケだつた。とてもこわかつた。とうとう頂上に着いた。晴れていた。遠くに富士山がきれいに見えた。まわりの山が小さく見えた。少しさむかつたけれど気持ちよかつた。雲海もとてもきれいだつた。北岳はこんなに高い山なんだ。なみだが出るくらいうれしかった。

# 時を越えていま

## ウォルター・ウエストン



他数名の村人を南アルプスの登山案内人としてウエストンに同行させることとなった。この時ウエストンは、外国人として初めての北岳登頂を成功させている。

その人は南アルプスを拓き、「登山の村・芦安」の夜明けをもたらした登山家である。

イギリス人牧師であるウォルター・ウエストンは宣教師として来日した。ウエストンと芦安村との結びつきは明治三十五年八月、彼が村役場に南アルプス登山案内の依頼をしたことに始まる。当時の村民は「神聖な“霊山”を外国人に汚されてはなるものか」と反対運動を起し、ウエストンの入山を拒み続けた。しかし、時の村長・名取運一はまことに紳士的なウエストンの態度に感服し、村民たちを説得してまわり、清水弥十郎

明治三十七年七月、今度は南アルプス縦走をめざしてウエストンは再び芦安入りした。「木場の湯」に宿を取り、主人の清水多四郎から南アルプス一帯の気象や地勢について詳しい説明を受けた。そして、南アルプス縦走の手始めに鳳凰山を選んだ。天に迫る地蔵仏（オベリスク）初登攀に成功した彼は、その喜びを「霊峰は我が手中にあり。」と記している。そして、芦安の村人に対する限りない感謝の念と友好の気持ちを表して “Thank you, my dear friends.” とも記した。ウエストンの地蔵仏征服はまことに劇的だった、と案内人たちも彼の行動に感心し褒め称えた。鳳凰三山の縦走を無事に終えたウエストン一行は、その後大権沢左岸の道を白根御池へ出て草すべりを經由し、白峰稜線の調査活動を続けた。さらに、広河原をベースキャンプとして

野呂川の溪谷沿いに、大仙丈沢から仙丈岳に登頂し、その山岳景観の素晴らしさを褒め称え、広く世に紹介したのである。

この、十日間余に及んだウエストン一行の南アルプス登山は当時としては実に記録的なものであり、その手記は南アルプスの入口、「登山の村・芦安」を一躍世に知らしめた。ウエストンの名は、この記録とともにいつまでも南アルプス登山史に残るであろう。

### 歴史を物語る 芦安の地名

#### ドノコヤ峠

これは早川町奈良田と芦安村との交流のために超えなければならなかった峠。明治時代は奈良田峠と言われたようだが、大正時代に峠中腹に銅鉱が発見され芦安鉱山が銅之古屋鉱山と命名された事から今の呼び名になったようである。

芦安村側からは荷替場上流を右手に登る「土なぎコース」と、ドノコヤ峠直下の水沢右岸から取り付く「水沢コース」があり、それぞれの用途別で使用された。たとえば「土なぎコース」は、大量の物資の輸送や芦安鉱山の鉱石などの搬

出に使われた。急峻で狭い「水沢コース」は主に通勤用や連絡用に使用された。

しかし今では、はつきりした踏み後の部分は少なく、峠の奈良田側も崩壊が進み、昔の面影は見当たらない。峠は歴史の生き証人といわれるが、ここを只の歴史の通過点とするにはあまりにも寂しすぎる。

## 芦安ファンクラブ定例会

### 毎月・第3木曜日

御気軽にご参加ください。

場所：ふれあい館（芦安小学校横）

時間：7：30 pm

芦安ファンクラブ通信は年4回発行し、芦安村の活性化を目指す様々な提言をしてゆきたいと思えます。読者の皆様からの御意見はファンクラブの活動を有意義な内容にするために不可欠です。どうか、自由で遠慮のない声をお聞かせください。芦安ファンクラブに関する詳しいお問い合わせ、入会のご希望は下記まで。尚、年会費は1,000円、南アルプスと芦安村に夢を語ってくださる方でしたらどなたでも大歓迎です。

〒400-0241

山梨県中巨摩郡芦安村芦倉1589-8



# 母語・郷土と人間 伊東藍

「ジントウ パカニ ウイルー（朝日が本場にきれいだね）」、と私。

「ウーア ウィルー（そつだね、本場にきれいだね）」、とガニンジャさん。

ガニンジャさんとはオーストラリアは内陸部にある砂漠に暮らしているある村の長老。彼女は私が初めて会話した先住民族アナング（アボリジニ）である。この会話の言葉はガニンジャさんらの住む地域の先住民族が話す「ピッチヤンジャジャラ」という言語。この時の会話をきっかけに私の「ピッチヤンジャジャラ学習」がスタートした。それは一九九七年オーストラリア留学中のことであった。二度目にまたその地を訪れたのは、二〇〇〇年四月。「ニヤガチャチャラカレツジ」と言う小さな学校で清掃員とし

て働くことができた。そこはもちろんなアナングの子供達の学校である。「ピッチヤンジャジャラ」を話したい私にとつてその仕事は、生の「ピッチヤンジャジャラ」を聞ける絶好の場であった。アナング（アボリジニ）という言葉は初めて耳にした方は、北海道に住む私たちの先住民であるアイヌの人々を連想していただきたい。世界中どここの国にも先住民族は存在する。オーストラリアの先住民がアナングというわけである。今や世界中にその名が知れ渡った有名なアナングがいる。シドニーオリンピックの最終聖火ランナーをつとめた、キャシーフリーマンという女性である。

アナングは、五万年前（七万年前という説もある）に最初に大陸にわたってきたと言われている。カンガルータカゲといった獲物や、水を求めて移動する狩猟生活を送っていた。イギリス人がオーストラリアに初めて上陸した今から約二百年前までずっと、孤立した自由な生活を送ってきた。イギリス人による開拓のため首に重たいチェーンを巻き付けられて捕らえられたり、過酷な労働を強いられたり、強制的に英語など白人教育を受けさせられたりした事はまだ記憶に新しい事実である。私の知

る彼らの歴史はほんの氷山の一角にすぎないのだが、「ニヤガチャチャラカレツジ」では彼らと会話し、一緒に食事して、時には同じ布団で寝たりして彼らの生活の一部に携わることができた。そこにも「人」がいて「生活」



ウルル（エアーズロック）

があった。

「ニヤガチャチャラカレツジ」は世界的に有名な巨大一枚岩、ウルル（英語名：エアーズロック）の麓にあり、まだ立ち上がって三年目の小さな寮生の学校である。そこには野性的で、泣き虫で、踊ることが大好きな十代の子

供達がいた。彼らはすべての授業を英語で受ける。英語は彼らの就職のためにはどうしても必要である。家では家族と「ピッチヤンジャジャラ」で話し、学校では英語というわけである。学校からスクールバスに乗って約五分の所にユララという、世界的に観光で有名な町がある。そこは、ウルル（エアーズロック）を一目みたい、登ってみたいという世界中の人々で溢れかえっている。学校の子供達はいつも、ユララに行くときと世界中から訪れる様々な人々に会える環境にあった。その中でも特別多いのが日本人であった。ユララのホテルで働く友達からこんな話を聞いたことがある。「日本人の多くはお金をたくさん持っているがゆっくり旅行する十分な時間がない。だからとりあえずウルルに登り、写真を撮って、急ぐように帰っていく」彼らの多くはきつと、この土地に古くから住むアナング一人に会うこともなく、文化にも触れることなく日本に帰っていくのだから私は思った。私は日本人として少し恥ずかしい想いがした。

私が昨年の夏、北岳登山を突然思い立ったのは、1度目のオーストラリアの旅が少なからずそのきっかけであると感じている。アナングは、

彼らの生まれ、生きる土地をすべて知り尽くしている。私がかのアナングの土地で、彼らから学んだのは自然の偉大さ、厳しさだけでなく、故郷を愛する心でもあった気がする。肩の小屋近くの岩場から見たあのすばらしい夕日の空が、私が初めてガニンジャさんと話した日に見た朝日を思い出させた。アナングは本当は人々がウルルに登ることを恐れている。「やめてください」と叫んでいる。それは彼らにとつて神聖な儀式の場所だからである。（現在は国の法律で、ウルルの登山は本人の意志に任せるとされている）仮に北岳を訪れる登山者が、登山道でないお花畑をずんずんと登っていたら私たちは本当に悲しい。私たちは旅をするとき、そこに生活している人々を思いやる心が大切ではないだろうか。

私がある日「ニヤガチャチャラカレツジ」の子供達に「日本語」の授業を計画し試みたのは、将来彼らがウルルのツアー会社で働く、日本語を話せるガイドになつて「ピッチヤンジャジャラ」と「日本」をつなぐ架け橋になつたらすばらしいだろうかと考えたからである。夢のような話だが、あながち夢ではないかもしれない。

# 歴史

芦安村は古くから南アルプスの玄関口として岳人といわれる人々に大切にされてきた。近代登山、山岳文化の発祥の地であり、その住民気質から多くの名山案内人を育んだ地域である。山岳案内人は、登山者の荷物を背負い、自分の山に対する経験と知識を以って、その目的とする山頂へ立たせることが使命であった。明治、大正、昭和初期は今のような整備された登山道はなく、案内人が地形、目標物等から位置、標高などを想定し、勘で方向等を決めて登山する部分が多量あり、安全のために案内人なしでの登山は考えられない。ゆえに案内人は山のこと熟知した地元の人々が選ばれた。

明治時代には、清水伝十郎、清水駒吉、清水弥吉、清水高次郎、清水代松等の案内人が活躍している。また、明治三十五年イギリス人宣教師ウオルタ・ウエズトンが北岳に登山した時、当時の村長、名取運一の推薦により案内役を勤めた清水

# 山岳案内人

長吉、清水弥二郎は近代登山の幕開けに多大な足跡を残した。大正時代に入り森本正真、青木千代太郎、青木要造等が名山案内人として活躍している。

青木要造は大正十五年七月、東海銀行の牛奥氏を案内し、白峰三山を目指したが途中、間の岳山頂において牛奥氏が帽子を強風のため飛ばされたので、青木は「ここを動かなく」と牛奥氏に言い渡し、探しに行つて戻つてみるとその姿を見ることはできなかった。結局、頂上を下り三峰岳に寄つたところで遺体で見えられた。青木はその責任をとり案内人をやめてしまった責任感の強い人物であった。

大正十一年、甲斐山岳会が結成されたのを期に県内各地に案内人組合や山岳会の支部が設立された。芦安村においても支部が設立され、大曾利の青木久次郎宅を事務所として「甲斐山岳会芦安支部」と「登山案内人組合」の木製看板が掲げられ隆盛期を迎えた。青木九次郎宅は簡易宿泊所を兼ねた雑貨商を営んでいた。宿泊や物資の調達に便宜を図り、案内人の紹介もあわせて行つた。組合では山に対する知識や技術の習得、接

客マナーなどの講習会も行い、講習会を受けた者に「案内手帳」を交付して公証の証明とした。

「案内手帳」の中には「案内人の心得の欄があり、1 終始誠意を持つて事に当たりかりそれにも不快感を与えてはいけない。2 依頼を受けたときは規定の料金をあらかじめ告げ、規定以外の金品は一切請求しない。3 高山植物を採集しない。4 登山小屋、示道標を保護すること。などの案内人として守るべきことが記されており、さらに「注意の欄には必ず案内のときはこれを携帯し、登山者に提示する。などが記されており、案内人はこれを忠実に守つた。そのかい合つて「甲斐山岳会芦安支部」は、名取治太郎、名取久平、深沢松太郎、深沢善長、青木久次郎、清水又一、青木正一などの案内人を多数送り出した。

さらに、登山者に親しまれた案内人として角力の異名を持つ清水義信、酒の好きな深沢久義、深沢正勝なども忘れてはならない。

いかに芦安の案内人が登山者に信頼されていたか、親しまれていたかを裏付けるものとして、昭和六年の日本山岳会報に次のように記されている。

「此処(芦倉)の案内人は子供のごころより山仕事に従事して居る為め、他処のような一夜漬案内人は無様に見受けられ且数名の案内人にて組合を組織(略)小生等の伴へる清水義信、又一の両人もきわめて実直且懸命に世話を致し異荷物は十貫近くも背おひ、気持ちよき山旅を行い得たる。」と報いられている。当時



登山案内人

右から鈴木喜太郎、百瀬舜太郎、青木正一、青木正吉

ある程度整備され、寝具付き、食事も提供できる現在のような山小屋に生まれ変わって行くのである。

この様に、先人たちの血の滲むような日夜の積み重ねが合つた結果として、今日の様に登山道が整備され、北岳山荘をはじめとする立派な山小屋も建ち、全国各地から十

時はもちろんな今のようには林道はなく、山小屋等は非常に粗末なものであった。芦安の村から全行程を徒歩で行われたので、今とは比較できない程の日数、経費、さらに労力を費やしたものと思われる。言い換えれば驚沢なスポーツであったのである。

昭和三十七年に、十年間の歳月を費やして完成した野呂川林道の開通により、広河原が登山の

基地となり北岳を中心とする南アルプスへの登山も急速に大衆化してきた。必然的に案内人の仕事は少なくなり、やがてなくなつて行くのである。そこで山に対する愛着を捨てきれない案内人たちは、山小屋の小屋番として再スタートを切り、今までの貴重な体験をもとに登山者を温かい目で見つめるようになった。四十年代に入り、山小屋も

万人近い登山客が南アルプスを訪れるようになったことを我々は決して忘れてはならないと同時に、今後さらなる南アルプスの発展に努力をしなければならぬ。さらに、山岳文化発祥の立役者である芦安村の山岳案内人の功績を後世に伝えることも課せられた責務であると考え、

芦安村・総務課 青木可行